生涯学習センターきらめきでは、多くの市民の皆さんがさまざまな講座を受講し、楽しく学習しています。今回は、初春にちなんだ４つの講座を紹介します。

生涯学習センター　きらめき講座（教養講座）

教養講座の中からは、漢詩と日本の芸能についての講座を紹介します。
「陶淵明の世界」の神楽岡先生には、陶淵明の略伝や作品の特徴、また、漢詩に親しむ方法などを、
「ビデオ鑑賞・日本の芸能」の相羽先生には、日本の芸能の起こりや鑑賞するときの楽しみ方などを聞いてみました。

陶淵明の世界

陶淵明について簡単に教えてください。また、主な作品、その詩の特徴を教えてください。

陶淵明（365～427）は、中国の六朝時代の詩人です。字（あざな）は元亮。一説には本名は潜、字は淵明だといわれています。

若い頃は意気盛んで、29歳で江洲祭酒（学校行政をつかさどる長官）になりますが、官吏に馴れ染まず出仕と帰郷を繰り返し、41歳で辞職してからは、故郷で田畑を耕す生活を送ります。若い頃から世俗に合わせるという性格ではなく、有名な『帰去来の辞』は、最後の辞職のときに作られたものです。

故郷の田園で自適の生活を送った彼の詩は、多くの人々に親しまれ、「古今隠逸（いんいつ）詩人の宗」と評されています。

主な作品は、『飲酒』と題する二十首、『桃花源記』『五柳先生伝』『帰園田居』などがあります。

講師の神楽岡先生

講師の話を熱心に聞く受講生

田園詩人と呼ばれる彼の詩は、夏目漱石が『草枕』の中で言っているように、超俗的で自然と融合した境地を詠っています。私たちがよく知っている「悠然として南山を見る」は彼の『飲酒』の第五首に出てきます。詩の一部を紹介します。

採菊東籬下　　きくをとる　とうりのもと
悠然見南山　　ゆうぜんとして　なんざんをみる

彼は性来、酒と自然を愛しました。官僚としての拘束を免れ、自己の好むところに従って故郷の田園に帰った彼は、自然の中で平穏に満ちた生活を送り、自己の理想の境地に生きました。

漢詩とはどのようなものなのでしょう。

漢詩には、五言絶句とか七言律詩などがあります。絶句は四句で、律詩は八句です。また、五言とは一句が五字のもので、七字なら七言になります。

絶句、律詩は唐代に成立します。唐代以前は形式や規則が自由でした。これを古詩（古体詩）といいます。

唐代以降に、絶句、律詩、排詩（十句以上）などの形式や規則が整理されました。これを近体詩といいます。なお、唐代以降にも古詩は作られています。

新春にふさわしい中国の漢詩などはありますか。

新年や正月を詠ったものはほとんどありませんが、春を詠んだ詩はあります。なんといっても孟浩然の『春暁』でしょう。「春眠暁を覚えず」は、誰もが知っている詩句です。

春眠不覚暁　　しゅんみん あかつきをおぼえず
処処聞啼鳥　　しょしょ ていちょうをきく

「桃の夭夭（ようよう）たる」で始まる『桃夭』（詩経）も春らしい詩です。

桃之夭夭　　もものようようたる
灼灼其華　　しゃくしゃくたるそのはな

漢詩はむずかしいと思われがちですが、初心者が漢詩に親しむにはどうしたらいいのでしょう。

漢詩は決して難しいものではなく、案外、身近なものなのです。私たちの生活の中には漢詩の句がたくさん生かされています。面白くて笑いを誘うものもあります。そういうものの原典を図書館などへ行って調べてみると楽しくなります。そこから漢詩への興味を少しずつ深めていけばいいと思います。

ビデオ鑑賞・日本の芸能

芸能の起こりは何なのですか。

すべての芸能は仏事、神事から生まれています。落語、講談、浪曲などは、もとは『今昔物語』などにあるような仏教の説話が源流です。落語はこんなことをしていると笑われますよというオチのある話から、講談は絵解き説教から、浪曲は琵琶で弾き語る節談説教から生まれました。歌舞伎や浄瑠璃などももとは仏事から生まれています。奇術や曲芸は神様に奉納する太神楽から生まれました。その後は、それを楽しむ大衆によって、さまざまな方向へと発展していきました。

歌舞伎、落語などの芸能で、新春にふさわしい出し物をいくつか教えてください。

芸能はかならず季節感のある題目を選びます。

お正月には新春らしい縁起のよい出し物が上演されます。歌舞伎では、演目の一番最初に「寿三番叟（ことぶきさんばそう）」が演じられることがあります。大阪では今でも、初詣でに行く前に初笑いに落語や漫才を聞きに行く人がいます。落語の定番ものでは「初天神」「厄払い」「げんげしゃ茶屋」などが、小咄（こばなし）では「正月丁稚（でっち）」などが演じられます。

伝統芸能を鑑賞するときの楽しみ方を教えてください。

芸能とは、ただ単に見て楽しむことが本来の姿なのですが、現在では、多くの伝統芸能において予備知識なしに楽しく鑑賞することはむずかしくなってきています。歌舞伎や文楽などの伝統芸能には、きまりや約束事がありますから、それを知らずに鑑賞しても意味がわからず楽しむことができません。

例えば、歌舞伎に「だんまり」という演出があります。これは、実際には舞台に照明はついていますが、設定は暗闇なのです。その中で無言の役者が音楽に合わせてゆっくりとした動きを披露します。この動きや話の流れを理解するには、この場面が暗闇だという約束事を知っておかなければなりません。

このように、歌舞伎をはじめ能、狂言、文楽などには決まりや約束事があり、この美の世界を理解することが楽しむことの第一歩になるのです。それには、

講義を熱心に聞く受講生

講師の相羽先生

鑑賞前にガイドブックを読むなどの予備知識を頭に入れておくことをお勧めします。

これに対して、漫才などは予備知識がなくても劇場へ行けば誰もが楽しめます。これが伝統芸能と大衆芸能との大きな違いで、どれだけ人々の生活に近い所で息づいているかの違いでもあります。

落語は大衆芸能から伝統芸能へと移行しつつあるとささやかれています。何の制約も持たない漫才とは違い、和服で座布団に座り、話の進行にもある程度の型を持った落語のスタイルが馴染みにくいという話も聞きます。しかし、実際に落語を聞いてみるととても面白く、噺家（はなしか）の見事な話術に引き込まれていきます。噺家は「まくら」（演目の導入部分の小咄）で、客の笑いの層を見定めて、演目を決めます。

最近、落語はドラマなどの影響で再び活気を帯びつつあります。大阪には落語専門の劇場もできました。落語が再び私たちの身近な存在になるでしょう。